嫉妬

森瑤子

嫉妬 森瑤子

集英社

嫉　妬

1980年11月10日　第一刷発行
1981年 6 月20日　第六刷発行
著者――森　瑤子
発行者――堀内末男
発行所――株式会社　集 英 社
東京都千代田区一ツ橋2～5～10　郵便番号101
電話――(03) 238～2842（出版部）238～2781（販売部）
印刷所――凸版印刷株式会社
定価――780円

© 1980 Yoko Mori, Printed in Japan
著者との了解により検印は廃止します
乱丁・落丁本はお取り替えします
0093－772283－3041

嫉

妬

装丁　亀海昌次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母に、そしてわたしの娘 *Heather* に

一、渚の死

眠りの深い霧の底から、ゆっくりと浮び上ってくる過程に、優しい風の予感があった。すっかり目覚めた時、彼女の口元には微笑が浮んでいた。薄絹のヴェールが顔の上をそっと撫でていくひんやりと冷たい感触。季節が変ったのだ。しかも一夜のうちに。微睡(まどろみ)の最後の一時を、なおも貪りたがっている重い瞼を、無理矢理に押し開くと、上下の睫の透きまから、カーテンが青いスピニカのように膨(ふくら)むのが見えた。顔の上に吹いている微風は、潮風だった。そこでやっと、自分が何処で目覚めたのか思い出す。都心のコンクリートの部屋の中ではなく、海の見える、木と煉瓦と石とで造られた友人の荒崎の別荘の、田舎風のベッドの中にいるのだ。海の側(そば)で眠る時だけに得られる完璧な熟睡。

寝台の一方の端で、彼女の夫は壁に額を押しつけるようにして眠っていた。ヨーロッパ製の頑丈で古風で大きなベッドなのに、彼は窮屈そうに長い肢をお腹の方に引きつけるようにして眠る。右手の上に軽く頬をのせ、もう一方の手は、イヴが印度綿の布切れを寄せて縫ったキルティングのベッドカヴァーの上に、無造作に投げ出して。夫があまりにも無防備に、睡眠の深い混沌の底に横たわっているのを見ると、麻衣の胸はちょっと悲しいような愛情で、一杯になる。

夜の間わずかだけ開けておいた枕元の窓の前で、気紛れに踊っているカーテンの端を捉えて、ガラスに顔を寄せると、外には、先刻の予感通り、昨日とは全然別の季節が始まっているのだった。ひとつの季節の終りに何時も覚える胸騒ぎ。一振りの鞭のように不意に振り降ろされた欠落感。フランス窓を押すと、窓は海に向って開いた。重く淀んだ夜の空気が、微かに潮の香りのする蒼い早朝の冷気と、一瞬のうちに入れ変る。だしぬけにセロのトレモロに似た波の音が、長く尾を引いて響き渡った。

傍の壮一郎の身体が、上掛けの下で動いた。

「昨夜はずいぶん海が荒れていたようだね。波はまだ高いかい？」

きな台風だったから……今朝は風が変ったようよ。……潮も。秋だわ」
「だって、まだ九月だよ」まだ完全に目覚めていない温い手が、妻の方に伸びる。
何処とは明白(はっきり)言えないが、透明な大気のそこかしこに、更に透けて見える一層透明な亀裂があって、そこから射し込んでくる冷たい光のようなものを凝視しながら、麻衣はきっぱりと言った。
「ええ、九月ですけど。やはり秋の気配が見えるわ」
壮一郎の手が妻の腕を捉えた。麻衣が窓際から離れる。「曜子が目を覚すわ」
彼女は夫が開けてくれた温い透きま(スペース)の中に、素早く滑りこむ。「鍵がかけてあるよ」と彼が言う。
白いシーツに包まれて、彼女は巧みに裸にされ、二つの肉体のどの部分も、申し分なくぴったりと触れ合った。沈黙が支配する完全なる性愛。沈黙は好ましい馴れ合いなのだ。言葉が表現するには、あまりにも深い一致がある。寝台は安全で美しい快楽の舟だ。ゆるやかに揺れながら、やがて二人の肉体(からだ)は次第に熱を帯びて、汗で薄っすらと輝き、最後にひとつの美しい橋(アーチ)になる。

「とても良かったね。違う?」
「何時も、あなた、そう言うのね」麻衣は笑う。
「事実、何時もそうだもの」
やがてシャワーの音を縫って聴こえてくる壮一郎の口笛。曲目の名は知らないが、たいてい同じメロディーの同じフレーズ。
浴室から戻ると彼は、少し縮れた髪から落ちる滴をタオルに吸い取らせながら、皺になったキルトの下の妻の躰に、批難するような視線を投げて言った。
「この家の本当の持ち主たちが、そろそろやってくるよ」
性愛のすぐ後で、そんなふうに無関心な声で喋れるのは男の特権なのだ。しかし麻衣は、そのことにいつもわずかに傷つけられたような気持になる。
焼かれるような幸福感は久しく失われて無いが、それに代って平静で正常な深い喜びがある。そしてこの平静さこそ、十六年の結婚生活が築き得た、ひとつの理想的な状態なのではないだろうか。
確かにそうではあるが、と麻衣は、コーデュロイのズボンの上に、白いサマーセーター

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

がそうであるように性愛もまた正常(ノーマル)で、清潔で、そしてあまりに習慣的なのだ。おそらくそれは来週の土曜も同じだろう。一月後も一年の後もそして十年後も同じだろう。それでいい、と思う。それ以外の夫婦のあり方を望んでいるわけではなかったから。そこでようやく彼女は始まったばかりの一日の方に、注意を戻しながら、起き上った。

約一カ月後にニューヨーク支店に転勤になる、壮一郎の同僚北原進とイヴ夫妻の別荘を、当分使うことはないからというので二カ月前から借り始めた。出発の前の最後の機会だからと、壮一郎たちが熱心に勧めたので、夫妻は、この土、日曜にかけて泊りがけでやってくることになっている。

北原の妻のイヴは、彼がシカゴ駐在時代に結婚したアイリッシュ系のアメリカ人なので、どちらかと言えば家庭的で清潔を第一と心がける種類の人間だから、別荘の中をもう一度念を入れて掃除しておきたかった。それと彼らのために今夜は近所の別荘に来ている人々を、何人か招(よ)んでお別れのバーベキューディナーを催す予定にもなっている。

このあたりは、ずいぶん以前から、在日外国人たちが、景色が良いのと海水が美しいこと、人家や漁村から少し離れているのでプライバシーが保てると言った様々な理由で土地

を買い、別荘を建て始め、十年ぐらいの間に自然に小さな村（ビレッジ）のようになったところで、相模湾に面して点在している別荘の七割は、そうした外国人や、それに類する家族が週末毎に利用していた。北原とイヴは子供がいないので、よく岡村壮一郎夫婦と娘の曜子を招待してくれた。

ニューヨークを振り出しに、ハノーバー、ロンドンと海外生活が長かった壮一郎夫婦にとっても、十何年かぶりの東京であった。帰国して一年半ほどになるが、留守のあいだ貸してあった成城の家の借家人が、居住権を持ち出して今だに立ちのこうとしない。その件を弁護士に一任したが交渉はいっこうに捗（はかど）らず、自分の家がありながらそこに入れないという苛立たしい混乱が現在まで続いている。夫婦はとりあえずのつもりで、西麻布のマンションを借りたが、仮りの住いの予定がもう一年半を過ぎ、このために麻衣も心身ともに寛ぐということがない。弁護士にまかせた頃から、借家人の態度が硬化してしまったと聞く。借り主の妻という女からは、時折長電話が入り、もう何十回も同じ調子の言い訳めいた愚痴を聴かされてきた。つい昨日も、朝の一段落がついた頃に電話がかかってきた。その時女が言ったことを、いい加減に聞き流したのだが（結局彼女といくら話しても事の進

が意味ありげに浮び上ってきた。

――主人はあくまでも居住権を主張するんですよ、何しろ、賃貸契約がしてないから、当然ですけどね。でも私の方は女ですから、こんな針の筵に座らせられているような生活は疲れるのよねぇ、お宅の弁護士さんは一日おきに脅したり賺したりしつっこいんですから。苛められるのは何時も私なのよ。いっそ家を明け渡したいところだけど、引越だ、新しい家の敷金だなんだと、ずいぶんかかるでしょ……まあざっと見積っても四、五百万というところかしら。こんな大金は、おいそれとはできませんしねぇ――

耳朶のあたりに不快感を覚える女のちょっと緩んだ甘い声が延々と続き、麻衣はいつのまにか上の空になり、最後には弁護士に連絡させますから、ときまり文句を言って切ったのだが、今、その時の会話を、改めて反芻してみる。四、五百万円出せば、立ち退くという暗示なのだろうか。朝食の仕度をする手を休めて彼女はじっと考えこむように眉を顰めた。それで家が戻り、心労や苛立ちから解放されれば、安いくらいかもしれない。それにしても、十何年かぶりの東京の暮しは、物価や価値観が、大きく変動したし、第一人々の考えていることが皆目理解できない。故郷に帰ってきたのに、まるで自分たちが異邦人で

そもそも海外勤務がきまった時に、閉めたままにしておくよりは建物が傷まないからと、管理をしてもらうような意味で、家を貸したのだ。借り手は壮一郎の親戚筋でもあったので、家賃と言っても相場の1/3程度だった。この時は問題もなかったが、彼等が地方転勤になり、その紹介で入ったのが、現在の問題の一家である。その頃壮一郎たちはニューヨークからハノーバーへ移転したばかりで、仕事の引き継ぎとそのうえ曜子の誕生などが重なって、成城の家の賃貸契約書の交換については延ばし延ばしにしているうちに、家賃などは毎月きちんと銀行にふりこまれていたし、丁重な手紙などもくれたこともあって、何時のまにか、忘れていたのだった。帰国の六カ月前に、その旨を手紙で知らせ、家の明け渡しを要求したのだが、帰ってみると、事態は深刻だった。中堅どころの企業のサラリーマンだという借家人にとってみれば、もう十二年近くも住みなれた家だし、何しろ家賃が法外に安いこともあって、おいそれとは明け渡したくないというのが正直な気持なのだろうが、壮一郎は契約をきちんとしておかなかった自分の不手際は充分すぎるほど悔いはしたが、もともと親戚の知り合いだと言うので、信用もし、安すぎる只同様の家賃で十二年も家を借りておいての、この理不尽な仕打ちに、激しく腹を立てたのは言うまでもない。このような事情で、帰国早々、鬱々として気分が安まる時もなく、争いが長期にわたるこ

とを覚悟してようやくこの頃になって、壮一郎は妻や娘のために、夏休みをこの問題から少し離れて過ごさせようと、荒崎の別荘を借りたわけだった。周囲の人たちがお互いの職業や生活に良い意味で無関心な外国人が多いということも、気を張らなくて済み、夫婦はここへ来るとほんとうの故郷に戻ったように解放感を味わうことが出来た。

相模湾に面した食堂の窓からは、晴れ上った朝ならば、湾曲した海岸沿いに海を遠巻きにしている伊豆半島が、くっきりと見えるのだが、台風の後の強い余波のせいで、水蒸気のような、濁った靄が立ちこめ、水平線は判然としない。黙って紅茶を口に運んでいる壮一郎の背後に見える灰色の海面は、まだ蜒(うね)りが異常に高かった。昨夜は十時頃着いたので海は見えなかったが、荒い波の音だけは朝までずっと続いていた。

時折、途方もなく大きな無数の波が、競走馬のように白波を蹴立てて佐島方面へ疾走していく。そのひとつが海面に突き出している黒い岩に襲いかかると、けたたましい悲鳴のような轟音を響かせて砕け散る寸前、前肢で空を掻き、見事な駿馬さながらの姿(フォルム)を、一瞬だけ空中に高々と聳(そそ)り立てた。飛沫が、純白の鬣(たてがみ)のように耀いてから後方に飛び散り、そして跡形もなく大気の中に消える。

麻衣は窓の外の光景から視線を外して、手にした紅茶をみつめた。両掌の中にすっぽり

と収まる大振りで温い陶製の茶碗の感触や、新聞の配達されない週末のこうした朝が好きだった。彼女は五年後、十年後の朝について考えることがある。多分皮膚は少し固くなり髪に白い毛が混りはするだろうが、やはり濃いたっぷりの紅茶と、ベーコンの脂肪(あぶら)で狐色に揚げたパンと、ベークト・ビーンズといった田舎風(カントリースタイル)の朝食を前にした、朝刊なしの穏やかな週末の朝のことを。

「曜子はまだ起きてこないのか?」と壮一郎が妻に声をかけた。

「昨夜(ゆうべ)は遅くまで本を読んでいたようですから」

あの子は最近どんな本を読んでいるのだろう? 十歳の時、ロンドンの小学校の図書館から借りてきた本は、ジェイムス・ヒルトンの、グッドバイ・ミスター・チップスやイーニッド・ブライトン、それにエミリー・ブロンテの小説だった。

「女の子があまり寝坊するのは、感心しないね」

「あの子はもうじき十二歳よ」

夫は娘を何時までも進んで子供扱いにしようとしすぎる、と麻衣は思い、フォークを皿のふちに置いて言った。「あなたがあの子に答えておやりになるのを聞きましたけど、宗教のこと、私、あまり頭から否定なさるの賛成できないわ。宗教を持つのは、結局、あの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com